

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

トンボ目アオイトトンボ科

# コバネアオイトトンボ

*Lestes japonicus* Selys, 1883

### カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):北山拓

### 島根県固有評価

—

### 環境省カテゴリ

絶滅危惧ⅠB類(EN)



### 選定理由

県内での分布がもともと限られる種であるが、近年、過去の産地のほとんどで生息の確認ができなくなった。全国的にも減少が著しく、特に中部、関東地方では、ほとんどの県で絶滅状態である。微妙な環境変化が、本種の生息に大きなダメージを与え、他種に先駆けて絶滅するようである。

### 概要

全長38-44mm。金緑色があざやかな中型のイトトンボ。県内に生息するアオイトトンボ属3種中、最小である。平地から丘陵地にかけて、ヨシなどの抽水植物が生ずる自然度の高い池沼に生息する。初夏の頃に羽化し、秋遅く11月頃までみられる。国内では青森から鹿児島までほぼ全県に分布するが、いずれの地域でも減少傾向が著しく、絶滅した地域も少なくない。新たな産地が発見された場合は、ため池周辺の環境も含めた保全が必要である。

### 参考文献

北山 拓・林 成多・大浜祥治 (2018) 島根県に生息するトンボ目の目録と生態写真集。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 22, 1-116.  
宮本詔子・宮本聡史 (2015) 益田市のコバネアオイトトンボの記録。すかしば, 62:46-47.  
大浜祥治 (2002) 隠岐諸島のトンボ相 補遺。すかしば, 50:1-36.  
大浜祥治・相田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相Ⅴ。ホシザキグリーン財団研究報告, 6:215-290.  
佐々木岳 (2024) 島根半島におけるコバネアオイトトンボの再発見。すかしば, 71:76.

### 県内での生息地域・生息環境

県内平野部に広く分布していたことがうかがえるが、過去の記録は島根半島部と隠岐(島後)に集中している。一方を雑木林に囲まれた植生豊かで比較的大きな池沼に生息する。現在の確実な生息地は隠岐(島後)の油井ノ池のみ。島根半島部で2023年に新たな産地が発見されたが(佐々木, 2024)、翌年以降全く確認できず、本土側での記録が途絶えている。

### 存続を脅かす原因

開発等による水域の植生環境の変化や背後林の消失。ため池改修等による長期間に渡る池沼の干し上げ。

(執筆: 大浜 祥治)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

トンボ目ヤンマ科

# アオヤンマ

*Brachytron longistigma* (Selys, 1883)

### カテゴリ区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):北山拓

### 島根県固有評価

—

### 環境省カテゴリ

準絶滅危惧(NT)



### 選定理由

かつて県東部の平野部や隠岐諸島では比較的普通に見られたが、過去の産地のほとんどで生息の確認ができなくなっており、現在確実な産地は、隠岐(島後)と県東部の各1カ所だけである。全国的にも近年の急激な減少傾向が指摘されている。

### 概要

全長66-79mm。全身黄緑が鮮やかで、一見して他のヤンマと区別できる。幼虫の頭部は顕著な逆三角形でネアカヨシヤンマに似るが、腹部に背棘がないことで識別できる。羽化は5月上旬ごろから始まり、成虫は8月中旬ごろまで見られる。成熟したオスは、おもに日中、ヨシ原の間を縫うように縄張り飛翔する。交尾はヨシ原の中や、林縁の小枝などで観察される。メスは単独で挺水植物の茎に産卵する。初夏の頃はおもに日中の活動が多いが、盛夏にはほかのヤンマに混じって黄昏飛翔も盛んに行う。国外では朝鮮半島と中国中部、北部に分布し、国内では北海道南部から九州熊本まで分布している。

### 参考文献

種野耕一 (2018) 2017年に記録した出雲地方のトンボ。すかしば, 65: 5-10.  
種野耕一 (2022) 安来市佐久保湿地でアオヤンマとキロヤマトンボを採集。すかしば, 69: 69.  
大浜祥治 (2002) 隠岐諸島のトンボ相 補遺。すかしば, 50:1-36.  
大浜祥治・相田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相Ⅴ。ホシザキグリーン財団研究報告, 6:215-290.  
高橋淳志 (2000) 多伎町でネアカヨシヤンマ・アオヤンマの多産地を発見。すかしば, 48:42-43.

### 県内での生息地域・生息環境

挺水植物が繁茂する池沼やクリークに生息し、かつては松江市街地のお堀やため池などでも見られた。隠岐諸島では、島前・島後ともに記録がある。

### 存続を脅かす原因

挺水植物の多生する溝川や池沼の埋め立て。ヨシ原などの植生破壊。生息水域周辺や休息場所となる農地や山林への薬剤散布。

(執筆: 大浜 祥治)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

トンボ目サナエトンボ科

# ヒロシマサナエ

*Davidius moiwanus sawanoi* Asahina et Inoue, 1973

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):大浜祥治

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



### 選定理由

出雲市所原町での県初記録以来、約50年間記録がなかったが、2007年に益田市で新産地が発見され、2020年に安来市で産地が追加された。県内の現存産地はこの2カ所のみ。益田市の生息地は国内における本種(本亜種)分布域の西限となっている。

### 概要

全長39-46mm。黒地に黄色い条斑を持つ小型のサナエトンボ。日本特産種モイワサナエの西中国地方亜種で、1957年5月に山形県所原町で採集された1オスが本亜種の国内初記録であり、標本も現存。その後、広島県の八幡高原で多数の生息が確認され、広島産標本に基づき亜種記載された。

#### 参考文献

朝比奈正二郎(1974) 島根県産モイワサナエの正体。TOMBO,17:23.  
藤村俊彦(1959) モイワサナエ, 島根県に産す。新昆虫,12(5/6):45.  
宮本詔子・宮本聡史(2008) 島根県におけるヒロシマサナエの新産地発見と生態の記録。すかしば, 56: 53-64.  
宮本詔子(2024) ヒロシマサナエ, 2010年の匹見川支流調査記録。すかしば, 71: 30-31.  
大浜祥治・榎野耕一(2021) ヒロシマサナエを島根県東部から記録。すかしば, 68: 53.

### 県内での生息地域・生息環境

中国地方の他県の産地全てが、中国山地の分水嶺付近に形成された高標高(alt.500~800m)の湿原等を流れる緩流であるが、益田市の生息地は低標高(alt.50~100m)の里山的環境の溪流であり貴重。同様の環境は周辺に少なくないことから今後の新産地追加が期待できる。

### 存続を脅かす原因

里山や山林の開発による、生息環境の悪化や消失。

### 特記事項

中国地方固有亜種

(執筆: 大浜 祥治)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

トンボ目サナエトンボ科

# ナゴヤサナエ

*Stylurus nagoyanus* (Asahina, 1951)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):大浜祥治

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



### 選定理由

全国的に産地に限られる中、宍道湖を含めた斐伊川下流域は本種の多産地であった。1987年から継続している宍道湖岸の羽化殻調査によると、2000年以降羽化数がそれまでの1/100以下に減少するなど、近年の個体数激減状況が明らかになっている。

### 概要

全長59-65mm。夏に出現する中型のサナエトンボ。大きな河川の下流域全体を生活場所とする生活スケールの大きなトンボ。オスは流れの上をかなり長時間飛び続けメスを探す。日本特産種。

#### 参考文献

長瀬 翔(2013) 神戸川でナゴヤサナエの幼虫を採集。すかしば,(60):50.  
西脇淳浩・星川和夫(2001) 宍道湖におけるナゴヤサナエとウチワヤンマの羽化消長。ホシザキグリーン財団研究報告,(5):215-221.  
山陰むしの会編(1993)「山陰のトンボ」, 208pp.山陰中央新報社.  
佐藤仁志(1992) ナゴヤサナエの新産地(静間川)。すかしば,(37/38):50.  
宍道湖のナゴヤサナエ研究グループ(1988) 宍道湖のナゴヤサナエ。島根県野生生物研究会会報,5:1-14.

### 県内での生息地域・生息環境

斐伊川および静間川下流域のほか、神戸川でも生息が確認されている。斐伊川で産み落とされた卵や孵化した幼虫のほとんどは流下し、宍道湖内で成長する。宍道湖岸での羽化消長調査によれば、羽化は6月上旬から始まり、7月上旬をピークとして9月上旬まで続く。成虫の活動は羽化が観察される宍道湖岸ではまったく見ることができず、斐伊川河口から約30km上流までの斐伊川本川部で確認されている。

### 存続を脅かす原因

生息地周辺の開発による水質等河川環境悪化。成虫の休息場所となる里山の雑木林・河畔林等の伐採。

(執筆: 大浜 祥治)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

トンボ目トンボ科

# マイコアカネ

*Sympetrum kunkeli* (Selys, 1884)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



### 選定理由

過去の記録によれば、県東部の平野部で比較的普通に分布していたことがうかがえるが、2007年を最後に県内からの記録が途絶えており絶滅も懸念される。全国的にも近年急激な減少傾向が指摘されている。

### 概要

全長29-40mm。小型でやや細身のアカトンボ。成熟オスでは顔面が青白色になる。ヒメアカネ、マユタテアカネに似るが、本種では翅胸部側面に短い黒色条があることで識別できる。朝鮮半島や中国北東部にも分布し国内では北海道から九州まで記録がある。

#### 参考文献

北山 拓・林 成多・大浜祥治 (2018) 島根県に生息するトンボ目の目録と生態写真集. ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (22), 1-116.  
大浜祥治・祖田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相Ⅴ. ホシザキグリーン財団研究報告.6:215-290.  
淀江賢一郎・養父志乃夫 (1982) 島根県のトンボ相・Ⅰ. すかしば,18:1-26.

### 県内での生息地域・生息環境

過去の記録のほとんどは島根半島部周辺であり、中部・西部の沿岸部でも記録が散見される。おもに植生豊かな池沼に生息するが、本種は生息環境の変化に非常に敏感であり、生息地周辺の雑木林の伐採等わずかな環境変化であっても深刻な影響を受けてしまう。隠岐諸島では未記録。

### 存続を脅かす原因

生息する池沼の植生環境や水質の悪化。生息地周辺の雑木林等の伐採。  
(執筆: 大浜 祥治)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

トンボ目トンボ科

# ハッチョウトンボ

*Nannophya pygmaea* Rambur, 1842

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):大浜祥治



### 選定理由

湿地を代表する種で50カ所以上の産地が記録に残っているが、造成等による埋め立てや植生遷移による乾燥化のため、生息地の消失が顕著で現在確実な産地はわずか3カ所のみ。

### 概要

全長17-21mm。世界でもっとも小さいトンボの一つで一円玉ほどの大きさ。オスは成熟すると全身が赤化し、メスでは黄色、褐色、黒のまだら模様となる。羽化は5月中旬ごろから始まり、しばらくすると未熟及び成熟個体が湿地に入り乱れて見られる。交尾時間は短く、交尾を解いたメスは単独で打水産卵を行う。オスの警護飛翔もしばしば見られる。東南アジアを中心に広く分布し、国内では本州以南に分布する。

#### 参考文献

浜田高等学校自然科学部 (2016) 「ハッチョウトンボはどのようにして山を越えたのか～生き残りを懸けた戦略～」. 48pp.(権歌書房)  
宮本詔子・宮本聡史 (2010) 益田市中垣内町でハッチョウトンボを確認する. すかしば,(58):30.  
大浜祥治・祖田 周・淀江賢一郎・三島秀夫 (2003) 島根県のトンボ相Ⅴ. ホシザキグリーン財団研究報告.6:215-290.  
淀江賢一郎・養父志乃夫 (1982) 島根県のトンボ相・Ⅰ. すかしば,(18):1-26.

### 県内での生息地域・生息環境

低山地を中心に隠岐諸島を除く県全域に広く分布していたが、産地は局地的。日当たりがよく浅い湿地を好む。休耕田で一時的に大発生しよく話題になったりするが、草原化・乾燥化により生息できなくなる。

### 存続を脅かす原因

造成や残土処分等による生息地の埋め立てや、湿地の乾燥化、草原化。  
(執筆: 大浜 祥治)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

カワゲラ目カワゲラ科

# コカワゲラ

*Miniperla japonica* Kawai, 1967

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者): 稲田和久

島根県固有評価

分布域局限種

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



### 選定理由

斐伊川の中下流域が本種の唯一の確実な生息地とされているが、2000年以降は確認記録がなく、絶滅が危惧される。

### 概要

体長8mm前後の小型のカワゲラで、1属1種の日本固有種。基準産地である京都府宇治川では1958～1959年に確認されて後、記録が途絶えている。成虫は7～8月に灯火に飛来する。幼虫の確認は斐伊川下流域の1例のみで生態は未知な部分が多い。

### 参考文献

環境省 (2015) 「レッドデータブック2014-日本の絶滅の恐れのある野生生物-5昆虫類」  
 川合横次・谷田一三 (2005) 「日本産水生昆虫 一科・属・種への検索」, 1342pp. 東海大学出版会  
 国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所 (2007) 「尾原ダム自然環境調査業務 報告書」  
 国土交通省中国地方整備局斐伊川・神戸川総合開発工事事務所 (2010) 「尾原ダム自然環境モニタリング調査業務 報告書」  
 国土交通省中国地方整備局出雲河川事務所 (2011) 「尾原ダム自然環境モニタリング調査業務 報告書」

### 県内での生息地域・生息環境

1997年に斐伊川で初めて生息が確認され、1998年に中下流域で広範に成虫、1999年に下流域の流水部の砂河床で幼虫が採集されている。しかしながらそれ以降は確認記録がなく、2006・2009・2010年には斐伊川中下流域において本種を対象とした生息調査が実施されたものの、確認に至っていない。近年は沿川の灯火が虫の集まりにくいLED照明となり、ますます確認が困難となっている。

### 存続を脅かす原因

河川及び沿川の環境変化が考えられるが、生態未解明のため詳細は不明である。

(執筆: 剣持 康弘)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

バッタ目バッタ科

# カワラバッタ

*Eusphingonotus japonicus* (Saussure, 1888)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者): 公益財団法人ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



### 選定理由

県内の分布は局地的であり、生息環境の変化により急激に生息数を減らす可能性がある。

### 概要

体長約25～45mm。体色は、灰色から青灰色に黒色紋を散布し、河原の礫に似た色彩を持つ。後翅中央部に褐色の半円帯があり、その内側は鮮やかな青色。中礫から大礫サイズの円礫が堆積し、草が疎らに生えるような河川敷に生息する。成虫は7～10月に出現し、河川からやや離れた場所の灯火に飛来することがある。日本固有種で、北海道、本州、四国、九州に分布する。

### 参考文献

林 成多・大浜祥治 (2014) 島根県に生息する直翅目の目録と生態写真集, ホシザキグリーン財団研究報告特別号,(11): 1-90.  
 日本直翅学会編 (2016) 「日本産直翅類標準図鑑」, 学研.  
 長田 勝 (1997) 灯火で採集したカワラバッタ。 ぱたりぎす, (113): 54.  
 山田 学 (2003) 匹見町・高津川にてカワラバッタの生息を確認。 すかしば, (51): 30.  
 山本正志 (2006) 島根県中部地域(江の川流域)におけるカワラバッタの採集・観察記録。 すかしば, (54): 58.

### 県内での生息地域・生息環境

県内では江の川水系と高津川水系に局地的に生息している。過去に記録のある斐伊川水系や隠岐諸島では、現在は確認できない。過去の隠岐諸島における分布が確実であるとする、現在は絶滅したとみられる。

### 存続を脅かす原因

洪水が起こらないことによる礫河原の草地化。大規模洪水が発生し後の復旧工事による河床礫の移動や除去。

(執筆: 林 成多)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

カメムシ目コオイムシ科

# タガメ

*Kirkaldyia deyrolli* (Vuillefroy, 1864)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



### 選定理由

県内では隠岐諸島も含めて広く分布するが、繁殖地の減少が著しく、灯火に飛来する個体の確認例も少なくなっている。一部地域では確認例が増えているものの、引き続き危機的な状況である。

### 概要

体長48—65mm前後で日本最大の水生昆虫である。平野部から山間地の池や水田、休耕田、湿地などの止水域に生息している。成虫のオスが卵を守る習性がある。国外ではシベリア、朝鮮半島、台湾、中国、アッサムに分布し、国内では本州、四国、九州、対馬、南西諸島に分布する。成虫は飛翔能力があり、街灯に飛来することがある。

### 県内での生息地域・生息環境

県内では各地に広く分布しているが、繁殖地は少ない。水生植物の豊

#### 参考文献

福田貴之・林 成多(2023) 隠岐諸島中ノ島で13年ぶりにタガメを確認。ホシザキグリーン財団研究報告。(26): 214.

林 成多(2022) 島根県東部におけるタガメに関する覚え書き。すかしば。(69): 39-41.

ホシザキグリーン財団監修(2002)「みんなの宍道湖～自然観察ガイドブック～」。143pp.

Ogata, S., A. Nishiwaki, K. Yamazoe, K. Sugai and T. Takahara (2023) Discovery of unknown new ponds occupied by the endangered giant water bug *Kirkaldyia deyrolli* (Hemiptera: Heteroptera: Belostomatidae) by combining environmental DNA and capture surveys. *Entomological Science*. (2023) 26, e12540

富な池や休耕田を含む湿地でみられることが多いが、個体数の多い地域ではさまざまな止水域に生息している。水田は重要な繁殖場所であったが、近年は繁殖がほぼ確認できない。灯火へ飛来することがある。隠岐諸島では単発的な記録があり、本土側からの飛来や人為的な持ち込みの可能性もある。

### 存続を脅かす原因

生息地の水質汚濁、池沼の開発改修、自然遷移、ウシガエルなどの外来生物による捕食、農業を含めた水田管理方法の変化、灯火に飛来した個体の斃死、採集。特に繁殖可能な生息地の減少。

### 特記事項

2020年2月10日以降は「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」に基づき特定第二種国内希少野生動植物種に指定され、販売目的の捕獲・売買が禁止されている。

(執筆: 林 成多)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

コウチュウ目ハンミョウ科

# ハラビロハンミョウ

*Cicindela sumatrensis niponensis* Bates, 1883

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):皆木宏明

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



### 選定理由

河口付近の砂質海岸のみ生息するため、河川改修や浚渫による人為的な改変の影響を受けやすい上、生息地が限られ絶滅が危惧される。

### 概要

体長12—14mm。銅色で溝や点刻などは青緑色を帯び、上翅に黄白色で屈曲した帯紋がある。成虫は5～9月に砂質海岸の河口部など湿潤な砂泥地に好んで活動する。本州(中部以西)、九州、種子島などの限られた砂質海岸に分布するが、各地で減少傾向が顕著とされる。

### 県内での生息地域・生息環境

江津市以西の砂質海岸の一部でのみ生息が確認されている。生息地は背後に植生がある河口付近の砂質海岸で、春季に越冬成虫、夏季に新成虫が出現する。成虫は水際で湿った砂浜を敏捷に歩行する。幼虫は水辺に近い砂浜に巣穴をつくる。かつて生息していた県東部では近年確認されていない。

### 存続を脅かす原因

河口部での大規模工事や護岸、浚渫による改変、砂浜の浸食、車両の乗り入れ。

(執筆: 皆木 宏明)

#### 参考文献

皆木宏明(2018) 島根県におけるカワラハンミョウの分布状況について。島根県立三瓶自然館研究報告 No.16, 41-46.

皆木宏明(2025) 江の川河口におけるカワラハンミョウの生息状況について。島根県立三瓶自然館.No.23,37-41.

山田 学(2003) 島根県西部地域におけるハンミョウ類・ヒョウタンゴムシ類の採集および観察記録。すかしば(51): 34-36.

山本正志(2005) 島根県中部地域(江の川流域)におけるハンミョウ類の採集及び観察記録。すかしばNo.53,31-34.

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

コウチュウ目ハンミョウ科

# カワラハンミョウ

*Cicindela laetescrpta* Motschulsky, 1860

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)

撮影者(提供者):皆木宏明



### 選定理由

広い砂質海岸に生息するハンミョウで、生息地は局所的で絶滅が危惧される。

### 概要

体長15mm前後。上翅は白に銅緑色の模様があり、地域によって模様に変異がある。広い砂地面積を有する海岸に生息し、成虫は7~8月に出現する。砂上を敏捷に歩行し、近づくと飛翔する。北海道、本州、四国、九州に分布するが全国的に激減している。

### 県内での生息地域・生息環境

江津市以西の砂質海岸に局所的に生息し、確認されている生息地は少ない。成虫は夏季に出現し、汀線からやや離れた植物がまばらに生える開けた砂浜を敏捷に歩行する。幼虫も砂浜に巣穴をつくる。

#### 参考文献

皆木宏明 (2018) 島根県におけるカワラハンミョウの分布状況について。島根県立三瓶自然館研究報告 No.16, 41-46.  
皆木宏明 (2025) 江の川河口におけるカワラハンミョウの生息状況について。島根県立三瓶自然館.No.23,37-41.  
山田 学 (2003) 島根県西部地域におけるハンミョウ類・ヒョウタンゴミムシ類の採集および観察記録。すかしば (51) : 34-36.  
山本正志 (2005) 島根県中部地域(江の川流域)におけるハンミョウ類の採集及び観察記録。すかしばNo.53,31-34.

### 存続を脅かす原因

大規模工事による砂浜の改変や縮小、砂浜の浸食、車両の乗り入れ、植物の繁茂。

### 特記事項

平成24年に島根県条例に基づく指定希少野生動植物に指定されており採集は禁止されている。

(執筆: 皆木 宏明)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

コウチュウ目オサムシ科

# オオヒョウタンゴミムシ

*Scarites sulcatus* Olivier, 1795

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



### 選定理由

砂丘等に生息する大型のヒョウタンゴミムシで、全国的に減少しており、県内でも生息地が限られ、生息地が減少していることから、絶滅が危惧される。

### 概要

円筒形で体長28~38mm。全体が黒色で光沢がある。砂質海岸やそれに隣接する場所に生息し、成虫は5~10月に出現する。夜行性で日中は漂着物の下や地中の孔道に潜み、夜間に地表を徘徊して他の昆虫などを捕食する。飼育下ではコガネムシ科の成虫など甲虫類も大アゴでかみ砕いて捕食する。本州、四国、九州、国外では朝鮮半島、中国、台湾、東南アジアなどに分布する。生息環境は海岸に限らず、まとまった砂質の土地があれば内陸にも生息するが、日本では内陸の生息地は激減している。

#### 参考文献

端山 武 (2012) 浜山公園のオオヒョウタンゴミムシの記録。すかしば, (59) : 29.  
林 成多 (2006) オオヒョウタンゴミムシ成虫の出現時期について。すかしば, (54) : 65.  
林 成多 (2013) 島根県の海岸性甲虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (9) : 1-98.  
林 成多 (2015) 島根県の海岸に生息する昆虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (14) : 1-120.  
尾原和夫 (1989) 浜山のオオヒョウタンゴミムシ。すかしば, (32) : 31.

### 県内での生息地域・生息環境

出雲海岸から益田海岸に至る砂丘を伴う砂質海岸で、生息が確認されている。汀線から離れた海浜植物の植生地から背後の防風林内の砂地が生息域となっている。また、内陸側の砂丘にも生息する。また、隣接する道路の側溝に落ちている個体も少なくない。側溝に落ちた個体は、乾燥による死亡や餓死、ケモノによる捕食などの影響がある。

### 存続を脅かす原因

松枯れの進行による防風林の荒廃・消失。海岸浸食。砂丘における道路等の開発。

(執筆: 林 成多)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

コウチュウ目オサムシ科

# イワタメクラチビゴミムシ

*Daiconotrechus iwatai* (Uéno, 1970)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者): 新部一太郎

島根県固有評価

島根県固有種、基準標本産地

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



### 選定理由

松江市(大根島)にある玄武岩質の火山洞窟「竜溪洞」を基準産地とする大根島の固有亜属で、生息域がきわめて限られるため、同島の地中環境が変化した場合には他の地下性種とともに絶滅する危険が大きい。

### 概要

体長約3mm。黄褐色で扁平。複眼は完全に退化。背面に10対の長剛毛を有し、触角は長い。全体に地下適応の進んだ形態を示す。寿命や食性など生態はほとんど不明だが、局所的に複数頭確認されることから分布は一樣でないと考えられる。

ダイコンメクラチビゴミムシ属(以下、チビゴミムシを省略)は、ノコメクラ属とチョウセンメクラ属の中間形態を示す属で中国の浙江省に産する *Wulongoblemus* 属との類縁性も高い。本属には2007年に長崎県の対馬でホソメクラ亜属の2新種が記載され、本種と併せて3種が含まれる。これらは *Wulongoblemus* 属も含めて飛び石状の分布になっていることから、かつて海を渡った祖先の遺跡種という仮説が立てられた(Ueno, 2007)。2023年に沖縄で中国の大陸種と近縁なチビゴミムシが発見されたことからこの仮説は支持され、本種を含むダイコンメ

### 参考文献

Ueno, S. (1970) The Fauna of the Insular Lava Caves in West Japan III. Trechinae (Coleoptera). Bull. Nat. Sci. Mus., 13(4): 603-622.  
Ueno, S. (1971) The Fauna of the Insular Lava Caves in West Japan IX. Trechinae (Additional). Bull. Nat. Sci. Mus., 14(2): 181-185.  
Ueno, S. (2007) Blind Trechine Beetles (Coleoptera, Trechinae) from the Tsushima Islands, West Japan. Elytra, 35(2): 385-399.  
新部一太郎・星川和夫(2007) II章 竜溪洞に生息する生き物たち、松江市ふるさと文庫2: 30-49.

ラ属はチビゴミムシ類の系統進化を解き明かす重要な鍵となるだろう。

### 県内での生息地域・生息環境

本種が確認されているのは松江市(大根島)の竜溪洞のみ。個体数はきわめて少なく、これまでに計10個体が採集され(1970年2個体、1979年2個体、1997年1個体、2002年2個体、2005年2個体、2008年1個体)、以降の採集記録はない。幼虫は未知。

島根半島を中心とした地下生物調査では確認されていないことから、分布域は竜溪洞を含む大根島の地下空間のみと考えられる。具体的な範囲は明らかではないが、同島のほかの洞窟(幽魂洞)で見られないことから島内全域に分布しているわけではない。洞内では湿潤な泥上に転石があるような環境で見つかることが多く、特定の微環境を嗜好している可能性が高い。

### 存続を脅かす原因

周囲を中海に囲まれている大根島の地形特性から地下水の流路や水質変化は脅威となり得る。また本種の生息に地下の微生物相が関与している可能性があることから、地表からの肥料などの薬剤浸透による微生物相の変化にも注意を要する。

(執筆: 新部一太郎・星川和夫)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

コウチュウ目オサムシ科

# イソチビゴミムシ

*Thalassoduvalius mashidai mashidai* Ueno, 1956

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

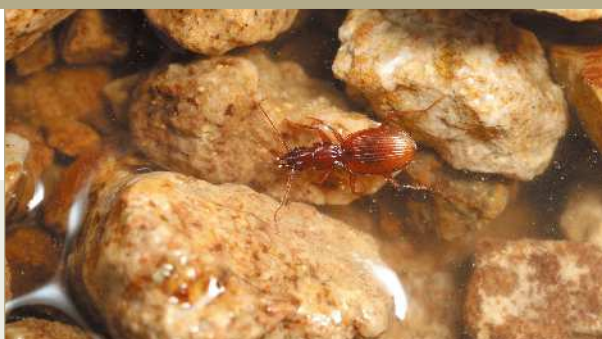
撮影者(提供者): 公益財団法人ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

基準標本産地

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



### 選定理由

周布川河口で発見されたチビゴミムシで、島根半島で再発見された。限られた潮間帯の岩礁に生息し、絶滅が危惧される。

### 概要

体長4.6-4.9mm。浜田市周布川河口で発見され、新属新種として記載された。全体が褐色で頭部が大きく、上翅は丸味が強い。満潮線の近くの下大きな石の下や積み重なった礫の底で、真水が海にしみ込むような場所を好むといわれる。愛媛県宇和島、神奈川県真鶴町、伊豆大島などに別亜種が分布する。遺伝的にも分化が確認されており、本州日本海側の個体群(北陸~九州北部)は遺伝的にまとまっている一方で、瀬戸内や太平洋側の個体群とは大きく分化している。

### 参考文献

林 成多(2013) 島根県の海岸性甲虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号(9): 1-98。  
林 成多(2015) 島根県の海岸に生息する昆虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号(14): 1-120。  
河上康子・林 成多(2007) 日本海沿岸の海岸性甲虫類の研究(2) 島根半島。ホシザキグリーン財団研究報告(10): 37-76。  
Nakahama, N., R. Okano, Y. Nishimoto, A. Matsuo, N. Ito & Y. Suyama (2022) Possible dispersal of the coastal and subterranean carabid beetle *Thalassoduvalius masidai* (Coleoptera) by ocean currents. Biological Journal of the Linnean Society, 135 (2): 265-276.  
Ueno, S. (1956) New halophilous trechids of Japan (Coleoptera, Harpalidae). Mem. Coll. Sci. Univ. Kyoto, ser. B, 23 (1): 61-68.

### 県内での生息地域・生息環境

周布川河口左岸の岩場で、こぶし大の小石が堆積した下の海水中から採集された。その後は長らく未発見であったが、2006年に島根半島の海岸2カ所で再発見された。背後地の崖から淡水がしみ出すような岩礁地の礫の隙間や波打ち際の隙間で採集されている。

### 存続を脅かす原因

大規模工事による礫浜の改変、漂着物の堆積など生息環境の悪化。降水量の低下による、汀線に供給される湧水の途絶。

(執筆: 林 成多)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

コウチュウ目ゲンゴロウ科

# マルコガタノゲンゴロウ

*Cybister lewisianus* Sharp, 1873

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠA類(CR)



### 選定理由

本種は国内ではもっとも絶滅の可能性が高いゲンゴロウの一つで、とりわけ西日本の個体群はきわめて危険な状況にある。県内では数例の記録があるのみである。

### 概要

体長21–26mm。背面は暗緑色で前胸背板・上翅に黄色の縁取りがある。腹面は全体に黄色。体は卵形で丸みが強い。大きさが近いコガタノゲンゴロウの体型はより長卵形で、腹部は全体に黒色を帯びる。生息場所は、水生植物の多い池などの止水域である。比較的、大きな池に生息することが多い。本種は中国、インドシナに分布し、国内では本州と九州に分布する。本州での分布は青森県から山口県までと広い。

### 県内での生息地域・生息環境

松江市では1955年の記録が残されている。2003年秋に県東部で採

### 参考文献

林 成多 (2011) 島根県の水生甲虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (1): 1-117.  
林 成多 (2020) 改定 島根県の水生甲虫(1)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (25): 1-84.  
小早川誠 (2004) 島根県内にて希少ゲンゴロウを採集。すかしば, (52): 8.  
中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之 (2020) 「ネイチャーガイド 日本の水生昆虫」, 文一総合出版。  
Watanabe, K. and M. Hayashi (2024) Description of the larva of *Cybister lewisianus* Sharp, 1873 (Coleoptera, Dytiscidae, Cybistrinae). ZooKeys, 1197: 137-152.

(執筆: 林 成多)

昆虫類

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

コウチュウ目ゲンゴロウ科

# ゲンゴロウ

*Cybister chinensis* Motschulsky, 1873

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



### 選定理由

かつてはふつうにみられた水生甲虫である。しかし、現在は激減し自然度の高い止水域で確認されるのみであり、絶滅が危惧される。近年の確認例は著しく減少しており、危機的な状況は続いている。

### 概要

体長34–42mm前後。前胸背板・上翅に黄色の縁取りがあり、腹面は全体に黄色だが、中央部は暗色。オスの上翅表面は平滑だが、メスには細かなシワ状の溝がある。水生植物の多い溜池や水路、水田などの止水域をおもな生息地としている。国外では朝鮮半島、台湾、中国、シベリアに分布する。国内では、北海道、本州、四国、九州に広く分布し、垂直分布も広い。日本の代表的な大型水生甲虫であるが、全国的に減少傾向が著しく各都道府県のレッドデータブックに掲載されている。

### 県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島では古い記録があるが、2013年に西ノ島で死体の確認例がある。本土側では各地に分布しているが、産地は山間部など局地的であ

### 参考文献

林 成多 (2011) 島根県の水生甲虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (1): 1-117.  
林 成多 (2020) 改定 島根県の水生甲虫(1)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (25): 1-84.  
中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之 (2020) 「ネイチャーガイド 日本の水生昆虫」, 文一総合出版。  
西城 洋 (2001) 島根県の水田と溜め池における水生昆虫の季節的消長と移動。日本生態学会誌, 51(1): 1-11.

集された1頭が近年の確実な記録である。その後、県中部でも記録がある。県内での分布状況や生息環境については不明な点が多く、調査が必要である。本種の生息可能な止水域環境の条件は、非常に限られている可能性が高く、何らかの環境の変化により絶滅するおそれがある。

### 存続を脅かす原因

生息地の水質汚濁、池沼の開発改修、移入生物(特にヌートリア、オオクチバス、ブルーギル、アメリカザリガニ)の侵入・繁殖、違法な採集。ヌートリアは抽水植物群落や浮葉植物群落を破壊し、本種の産卵基質や幼虫の生息場所に大きな影響を与える。

### 特記事項

本種は「種の保存法」により2011年に国内希少野生動物植物種に指定されており、捕獲だけでなく、標本等の譲渡や貸借も許可無くすることはできない。生息状況を確認した上で具体的な保全措置を取る必要がある。

(執筆: 林 成多)

絶滅野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

コウチュウ目ゲンゴロウ科

# シャープゲンゴロウモドキ

*Dytiscus sharpi* Wehncke, 1875

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠA類(CR)

撮影者(提供者):公益財団法人ホシザキグリーン財団



### 選定理由

県内では中部や西部で数カ所の産地が確認されていたが、生息環境の悪化や消滅による絶滅が危惧される。近年の確認例がないことも憂慮すべき状況である。また、全国的にみても希少性が高い大型種のゲンゴロウである。

### 概要

体長28-33mm前後。コナギやオモダカ、ヒルムシロなどの生えた泥深い湿地や水路などに生息し、特に湿地化した放棄水田は本種のもっとも好む環境である。日中は泥に潜っていることなどから、他のゲンゴロウ類に比べて発見されにくい。本種は本州・佐渡に分布し、国外では中国にも記録がある。1990年代前後に生息が確認されている県は千葉、新潟、富山、石川、滋賀などである。島根県では1992年に初めて発見されたが、2001年に確認されたのが最後の報告となっている。

### 参考文献

林 成多 (2011) 島根県の水生甲虫。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (1): 1-117.  
 林 成多 (2020) 改定 島根県の水生甲虫(1)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, (25): 1-84.  
 小早川誠 (2007) 島根県内にてシャープゲンゴロウモドキを採集。すかしば, (55): 49-50.  
 中島 淳・林 成多・石田和男・北野 忠・吉富博之 (2020) 「ネイチャーガイド 日本の水生昆虫」。文一総合出版。  
 山本直樹・山岡幸雄 (1997) 島根県のシャープゲンゴロウモドキ。月刊むし, (321): 34-35.

(執筆: 林 成多)

### 県内での生息地域・生息環境

県内ではため池などで生息が確認されている。新たに生息地が確認される可能性はあるが、放棄水田などの湿地は遷移の進行により数年から十数年で乾燥化し、生息できなくなってしまう。

### 存続を脅かす原因

生息地の水質汚濁、池沼の開発改修、自然遷移、違法な採集。アメリカカザリガニなどの外来種の侵入。イノシシによる湿地の掘り起こしや、水辺植生への食害。

### 特記事項

本種は「種の保存法」により2011年に国内希少野生動物植物種に指定されており、捕獲だけでなく、標本等の譲渡や貸借も許可無くすることはできない。生息状況を確認した上で具体的な保全措置を取る必要がある。

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

コウチュウ目コガネムシ科

# ダイコクコガネ

*Copris ochus* (Motschulsky, 1860)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

隔離分布種

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

撮影者(提供者):皆木宏明



### 選定理由

本種は全国的に減少傾向にある。本県でも生息地は局限され、牧畜形態の変化によって絶滅が危惧される。

### 概要

体長18-28mm。黒色で光沢は鈍い。オスは、頭部に後方に反った1本の大きな角を持ち、前胸背板にも2対の突起があるが、小型なオスになるほど目立たない。メスは頭部に板状の横隆起と前胸背板に弧状に突出した横隆条と1対のくぼみがある。成虫は、5-10月に発生する。夜行性で牛などの大型の草食獣の糞をエサとする。牛糞下に坑道を掘り、育児室を作って数個の糞球を作り産卵する。シベリア、モンゴル、中国、朝鮮半島、北海道、本州、四国、九州に分布する。

### 参考文献

秋山美文 (2018) 庄原市立比和自然科学博物館に寄贈された渡部泰明氏採集の甲虫標本及び中本寛・修氏採集のフン虫標本。庄原市立比和自然科学博物館標本資料報告第18号, 45-74.  
 福井修二 (1994) 三瓶山の鞘翅類。島根県特定地域野生生物緊急調査(平成3年度)報告書「三瓶山の昆虫相とその保全」:31-55。島根県昆虫研究会。  
 野津幸夫 (1990) 三瓶山の食糞性コガネムシ。すかしば(34):17  
 曾田貞滋 (1974) 秋の三瓶にオサムシを求めて。山陰ムシタイムス。すかしばNo.1:6-7  
 鈴木謙治 (1994) 三瓶山の糞虫相。島根県特定地域野生生物緊急調査(平成3年度)報告書「三瓶山の昆虫相とその保全」:164-170。島根県昆虫研究会。

### 県内での生息地域・生息環境

本種は、三瓶山の一部の放牧地でのみ確認されていたが、近年放牧が休止され、絶滅の危機に瀕している状況である。

### 存続を脅かす原因

生息地での放牧の休止や牧畜形態の変化。

### 特記事項

平成22年に島根県条例に基づく指定希少野生動物植物に指定されており、採集は禁止されている。

(執筆: 皆木 宏明)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

コウチュウ目コガネムシ科

# アオハナムグリ島前亜種

*Cetonia roelofsi iijimai* K. Sakai, 1996

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧Ⅱ類 (NT)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):大浜祥治

島根県固有評価

隠岐島前固有亜種

環境省カテゴリー

—



### 選定理由

隠岐(島前)に生息する藍黒色のアオハナムグリで、島後には緑色の原名亜種が分布し、島前と島後で亜種が異なる特異な事例である。個体数の減少が著しい。

### 概要

アオハナムグリは体長16—19mm前後。南西諸島を除く各地に分布し、背面は緑色で変異は少ないが、五島列島と種子島に分布するものは赤色を呈し別亜種とされている。隠岐(島前)の個体群は、背面が藍黒色を呈し、他の地域とは異なっている。違いは体色のみであり、体色で区別される地域個体群と見なすこともできるが、その歴史的な成立過程は生物地理学的にみて興味深く、解明が望まれる。

### 参考文献

林 成多・門脇久志(2012) 隠岐諸島の甲虫類目録(1930-2011)。ホシザキグリーン財団研究報告特別号。(5): 1-120.  
林 成多・門脇久志(2018) 隠岐諸島の甲虫類目録 補遺(2012-2016)。ホシザキグリーン財団研究報告。(21): 1-26.  
酒井 香(1996) 隠岐諸島西ノ島産のアオハナムグリの新亜種。月刊むし。(309): 10-11.  
酒井 香・藤岡昌介(2007) 「日本産コガネムシ上科図説 第2巻 食葉群Ⅰ」173pp.昆虫文献六本脚

### 県内での生息地域・生息環境

本亜種は島前の3島にのみ分布し、島後は背面が緑色の原名亜種である。1994年に西ノ島で初めて藍黒色の1オスが採集され、翌年に採集された個体すべてが藍黒色であったため新亜種として記載された。成虫は6月ごろ出現しクリなどの花にくる。2014年改訂の時点で個体数の減少が著しいとされたが、その後の回復は確認されていない。

### 存続を脅かす原因

生態様が明らかでなく不明であるが、幼虫の食餌とされる倒木・朽木の減少。個体数が少なくなっており、採集による影響も無視できない。(執筆: 林 成多)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

コウチュウ目カミキリムシ科

# オオハナカミキリ

*Konoa granulata* (Bates,1884)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):福井修二

島根県固有評価

分布限界種(西限)

環境省カテゴリー

—



### 選定理由

日本特産種で冷温帯地域に生息する。本県で確認されている生息地域は、島根半島の枕木山周辺の低標高地域で特異な分布であるととも、分布西限である。

### 概要

体長15—23mm。頭・胸部は黒色、上翅は暗赤色。体全体に微毛を有する。北海道、本州に分布し、全国的には標高の高い冷温帯の産地が多い。成虫は6~8月に出現してアカメガシワ、ノリウツギ、リョウブなどの花に飛来する。また、ブナの立ち枯れに集まることが知られ、幼虫の食樹としてブナ、ダケカンバ、モミ、アカマツの記録がある。本県での寄主植物は不明であるが、これまで採集記録のあった地域ではブナは見られないことから、モミ、アカマツなどの針葉樹が利用されている可能性がある。

### 参考文献

福井修二(1987) 松江市のオオハナカミキリの記録。すかしば。27: 10.  
平田信夫(1951) 昆虫の採集と標本の作り方。「生物の採集と標本の作り方」。島根生物学会編 日本鞘翅目学会編(1984) 「日本産カミキリ大図鑑」, 講談社  
野津幸夫・中嶋清隆・下雅憲公夫(2015) 枕木山のカミキリムシの記録。すかしば。62:37-42.  
曾田貞滋(1977) 島根半島高尾山山塊及び松江平野のカミキリムシ。すかしば。7: 1-13.

### 県内での生息地域・生息環境

本県では枕木山を中心とする島根半島で採集記録があり、1940年代後半には、6~7月にアカメガシワなどの花上から採集されていたようであるが、1970年代頃から採集されなくなった。その原因は道路の敷設に伴う森林伐採とされている。枕木山周辺を始め、既報告地は森林伐採や、マツ材線虫病によるアカマツ大径木の消失など、森林環境は変化している。枕木山ではその後も断続的に2007年まで採集記録があり、生息していると考えられる。標高50m以下の平野部の市街地周辺の森林でも複数の採集記録があるが、それらの地域では近年の記録は無い。本県での生態、食樹等は不明なことが多いため、効果的な保護対策を講じるための情報蓄積が望まれる。

### 存続を脅かす原因

生息地域での森林伐採、とくに本種の寄生樹木の可能性の高いモミ、アカマツの大径木を有する生息環境の消失。(執筆: 福井 修二)

昆虫類

絶滅 野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チョウ目セセリチョウ科

# キバナセセリ

*Bibasis aquiline chrysaeglia* (Butler, 1882)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 淀江賢一郎



### 選定理由

隠岐(島後)を除けば近年の記録がなく、絶滅が危惧されている。

### 概要

翅長21-22mm。年1回6月中~下旬ごろから落葉広葉樹林周辺や山道脇によく姿を現わし、獣の糞に来たり、時には吸水、オカトラノオなどの花にも来る。吸水時には自分の排出液を吸う吸い戻し行動を見かける。午後には山頂付近で占有行動をとる。

### 参考文献

小林一彦(1957)毛無山を中心とした島根広島県境の蝶類採集報告。千鳥。(3):31-42。  
淀江賢一郎(1994)キバナセセリの解説と写真「山陰のチョウたち」P.142。山陰中央新報社。

### 県内での生息地域・生息環境

県内では、1957年奥出雲町(旧仁多町)呑谷で採集されたのが初記録。その後、雲月山、隠岐(島後)で採集されているが、隠岐諸島を除けば記録が古く共に1例のみのため、現在では生息していないと思われる。隠岐(島後)は海岸に近い所に生息地が見られるが、松枯れ対策の殺虫剤空中散布により、本種に悪影響が出ている。隠岐(島後)で確認されている食樹はハリギリ(山本正志氏の発見)。

### 存続を脅かす原因

ハリギリを含む落葉広葉樹林の伐採、殺虫剤空中散布。

(執筆者: 淀江 賢一郎)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チョウ目セセリチョウ科

# ホシチャバナセセリ

*Aeromachus inachus* (Menetries, 1858)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)

撮影者(提供者): 淀江賢一郎



### 選定理由

生息地が限定され、減少が著しい。

### 概要

翅長10-15mmでセセリチョウの中では最小。本州、対馬に生息し、山陰では7~8月にかけ年1回の発生。食草オオアブラススキがある樹林周辺の草原に見られる。各種の花を訪れるが、飛び方は敏速でハエのようにも感じられ、また風景に溶け込んで見失うことが多く発見しにくい。1980年代より各地で減少しまれにしか見られなくなっているが、セセリチョウという地味なグループのため、中・大型のチョウのようにとりたてて騒がれることがない。

### 参考文献

大島益堂(1951)浜田・長者原に産するホシチャバナセセリについて。昆虫石見。(2):16。  
山中捷二(1994)ホシチャバナセセリ解説。「山陰のチョウたち」:148。

### 県内での生息地域・生息環境

県内では西部の中国山地沿いで傍赤峠、雲月山、浜田市(旧旭村)キャンプ場で知られるのみだが、1980年後半からきわめてまれになっている。小型種のため発見も容易でない。

### 存続を脅かす原因

自然度の高い草原を破壊する開発、草地の荒廃。

(執筆者: 淀江 賢一郎)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チョウ目セセリチョウ科

# コキマダラセセリ

*Ochlodes venatus* (Bremer et Grey, 1852)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者):筆谷憲一



### 選定理由

中国山地沿いに生息地がわずかに見られるのみで、絶滅が危惧されている。

### 概要

翅長20–22mm。北海道から山口県東部あたりまで分布するが、北海道では低地でも見られ小型であり、中部地方から中国地方にかけては、山間部の湿地性草原に見られ、大型化。中部地方では標高2,000m近い乾燥草原にも見られる。翅が赤橙色で白く薄い斑紋があり、明るい感じがするチョウで、一見ヒメキマダラセセリにも似るが識別は容易。7月に多く見られ、敏速に飛ぶ。ノアザミ、オカトラノオなどの花を訪れ、時には吸水もする。

#### 参考文献

三島昭一 (2013) 島根県西部金城町のヒメシジミとコキマダラセセリを採集。すかしば, (60) : 27-28.  
山本正志 (2006) 島根県金城町弥波牧場にてヒメシジミ・コキマダラセセリを採集。すかしば, (54) : 44-45.  
淀江賢一郎 (1977) 島根県における湿原性蝶類3種の採集記録。すかしば, (8) : 13-15.

### 県内での生息地域・生息環境

県内では標高500m以上の湿原に見られるが、そのような条件に合う場所は中国山地沿いにわずかに見られるに過ぎず、個体数も少ない。湿地は遷移により植生変化する不安定な環境であり、今後の動向には注意を要する。

### 存続を脅かす原因

湿原の荒廃、乾燥化

(執筆: 淀江 賢一郎)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チョウ目シロチョウ科

# ツマグロキチョウ

*Eurema laeta bethesba* (Janson, 1878)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)

撮影者(提供者):筆谷憲一



### 選定理由

全国的に著しく減少しており、本県でも産地は局所的で、個体も減少している。

### 概要

翅長18–21mm。河川敷、堤防、海岸草地や、山間地の林周辺に生息する。食草はマメ科のカワラケツメイ。成虫は年2回発生し、夏型はキタキチョウとよく似ていて、混生地では識別が難しいが、食草から離れることなく周辺の花を訪れたり吸水したりしている。10月ごろに秋型が現われ、前翅の先端が尖り独特の褐色条が現われ識別が容易になる。越冬のため分散が著しく、発生地から離れた場所でも見られるようになる。

#### 参考文献

小坂一章 (2009) 高津川河畔のツマグロキチョウとシルビアシジミ。山口のむし, (8) : 31.  
尾原和夫 (2005) 2004年ツマグロキチョウの観察記録。すかしば, (53) : 30.  
田中正文 (2004) 六日市町幸地のツマグロキチョウ。すかしば, (52) : 23-25.  
山本正志 (2002) ツマグロキチョウの調査報告。すかしば, (50) : 37-38.  
淀江賢一郎 (2017) 大陸方面から山陰地方に飛来する迷入種(予報)。Neo Zephyrus, (1) : 65-69.

### 県内での生息地域・生息環境

奥出雲町(旧仁多町)、飯南町(旧頓原町、旧赤来町)、吉賀町(旧六日市町)などの山間地、安来市などに記録が多い。食草カワラケツメイは道路ぎわやガレ場的な荒地に群落を作るため、人為的な環境変化、他植物の進入など遷移の進行により、本種発生量は変動が大きい。新しくつくられたキャンプ場周辺や、ダム湖周辺などで多数見られることもある。また、吉賀町(旧六日市町)では農家が豆茶用としてカワラケツメイを無農薬栽培しており、本種が多数発生していたことがある。1985年島根半島の海岸線岩場で、大陸からの飛来によるものと思われる裏面が赤い個体群が多数観察されたこともある。隠岐(島後)では計2例の記録のみで、これも大陸からの飛来によるものと思われる。

### 存続を脅かす原因

カワラケツメイ群落地の荒廃。

(執筆: 淀江 賢一郎)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チョウ目シジミチョウ科

# ルーミスシジミ

*Panchara ganesa loomisi* (H.Pryer, 1886)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):筆谷憲一

島根県固有評価

分布限界種

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



### 選定理由

西日本の照葉樹林(常緑広葉樹林)に生息するが、その生息地は局限される。県内では隠岐諸島(島後)が唯一の生息地であり、個体数も著しく減少している。

### 概要

翅長13~15mm。国内の確実な生息地は千葉県清澄山、山口県長門峡、和歌山県古座川町、宮崎県綾町、鹿児島県屋久島など数カ所。最初の発見地、奈良県春日山では国の天然記念物に指定されていたが、薬剤散布で絶滅した。アカガシが混じる常緑広葉樹の渓谷に生息する。具体的には、両岸は切り立って険しい斜面となり、川はゆるやかに流れ、カシ類が鬱蒼とおおい茂り、風通しの悪いという条件の渓谷。7月中旬に羽化し、そのまま成虫で越冬、翌年5月ごろから活動を再開、食樹アカガシの新芽のりん包内部に1卵ずつ産卵する。年1化である。

### 参考文献

- 門脇久志(1976) 隠岐島の昆虫2. 隠岐島の蝶類. すかしば, (6): 3-23.
- 木村康信(1942) 隠岐の動物. 隠岐教育, (18).
- 松崎 隆(2009) ルーミスシジミ採集記録2001~2004年. 緑蝶, (9): 49-52.
- 小路嘉明(1993) ルーミスシジミのポイントの探し方. 蝶研サロン, (42): 1-12.
- 淀江賢一郎(1988) 隠岐島産ルーミスシジミの記録2題. すかしば, (30): 54.

### 県内での生息地域・生息環境

隠岐(島後)での野外観察では、アカガシの高所樹冠に潜んでいることが多く、目撃は容易でない。しかし、気温が30度を超す日には、暑さを避けるように谷底に降りてきて、時に吸水もする。隠岐(島後)の生息地は、全国各地の生息地と比較して規模はごく小さく、近年の道路工事による伐採などで、危機的状況に陥っている。一度消滅すると二度と回復することがないため、アカガシ原生林を破壊する大規模な伐採・植林や林道開発などは厳重な注意が必要である。隠岐諸島における最初の発見者は木村康信氏である。なお1950年代に三瓶山や大田市近郊で採集記録が残されているが再確認されておらず、また、上記した特殊な渓谷環境は見い出せず疑問がある。

### 存続を脅かす原因

高標高地の林道建設や大規模な植林によるアカガシの混じった自然度の高い照葉樹林の伐採。

(執筆: 淀江 賢一郎)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チョウ目シジミチョウ科

# ウラミアカシジミ

*Japonica saepestriata* (Hewitson 1865)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
準絶滅危惧 (NT)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):筆谷憲一

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



### 選定理由

生息地・個体数とも著しく減少している。

### 概要

翅長18~22mm前後。山地のクヌギを含む疎林や林、平地、低山地のクヌギ、コナラ、ナラガシワなどを含む雑木林に生息しているが、クヌギへの依存度が強い。平地では6月に発生、山地では7月でも見られる。山陰ではアカシジミと混生するところもあるが、本種のほうが少し遅れて発生する。日中は脅かさないと飛びこは少ないが、夕方から活発に飛び回る。

### 参考文献

- 三島昭一(1978) 出雲市の蝶類. すかしば, (10): 17-21.
- 中村泰士(1975) 匹見町のミドリシジミ類-付・恐羅漢のウラジャノメについて-. すかしば, (4): 3-5.
- 大田高校生物部(1965) 三瓶研究総合誌第一集. 34-40.
- 館林治志(1957) ウラミアカシジミ茶臼山で採集. 千鳥, (3): 26.

### 県内での生息地域・生息環境

県内ではもともとクヌギ林に乏しいこともあり、西部(旧六日市町など)、東部(旧大東町など)にわずかに記録があったのみで、近年県内における本種の目撃記録はないようである。古木ではなく若木を好むため、人為による定期的な雑木林の更新が必要である。

### 存続を脅かす原因

クヌギ林を含む雑木林の手入れ不足による荒廃。雑木林(二次林)は適切な伐採更新によって生態系が維持される側面がある。

(執筆: 淀江 賢一郎)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チョウ目シジミチョウ科

# キマダラルリツバメ

*Spindasis takanonis* Matsumura, 1906

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
—	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者): 筆谷憲一

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



### 選定理由

生息地は限定され個体数も少ない。

### 概要

翅長13-17mm。朝鮮半島、本州(北限は岩手県、西限は広島県)に分布。海岸部から平野部のクロマツ・ニセアカシア林、里山のソメイヨシノ・アカマツ林、クリヤキリなどが混じる雑木林、山地のカシワ林の4パターンの生息環境がある。年1回6月中旬から7月にかけて発生。夕刻、梢の先で占有行動をとって敏速に飛びまわる。鳥取市では天然記念物に指定されている。ムネジワハリブトシリアゲアリと共生して幼虫期(7令)をおくる。

### 参考文献

板垣 治(2008) 島根県安来市でキマダラルリツバメを採集。すかしば, (56): 32.  
三島昭一(2022) 55年ぶりに島根県で再発見されたキマダラルリツバメ。すかしば, (69): 35.  
能美 豪(2023) 山陰(島根県)のキマダラルリツバメ。月刊むし, (633): 34-36.  
淀江賢一郎(2025) 島根県から削除すべき蝶類の文献記録。すかしば, (72): 47-54.

### 県内での生息地域・生息環境

安来市伯太町で1965年6月1日に板垣治氏が採集した1オスが最初の確実な採集記録。この周辺では三島昭一氏、能美豪氏らにより近年再発見された。その他、三瓶山(伊藤宏氏)、匹見峽(山田学氏)でも目撃記録があり、再確認が望まれている。出雲市と六日市町の古い記録には疑問点があり、引用すべきでない。

### 存続を脅かす原因

安来市伯太町の山の反対側の生息地(鳥取県米子市奈喜良)では農薬空中散布によって減少した。シリアゲアリが巣をつくる樹木とその周辺の林の保全が必要である。

(執筆: 淀江 賢一郎)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チョウ目シジミチョウ科

# クロシジミ

*Niphanda fusca* (Bremer et Grey, 1853)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者): 筆谷憲一

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)



### 選定理由

1990年代から急激に生息地、個体数とも減少している。

### 概要

メスは下草にいるが、オスは樹上に静止、夕方には敏速に飛び回る。ともにノアザミ、ヒメジョオン、オカトラノオなどで吸蜜する。産卵する草はさまざまで、隠岐ではアキグミ。そこには必ずグミキジラミがいる。クロヤマアリ(知夫里島)、クロオオアリが近くにいることが条件となり、産卵するメスは近くの草木に止まり、アリの様子をうかがいながら、キジラミの近くに産卵する。やがて孵化した幼虫はキジラミの分泌物をなめ、幼虫自身が分泌物を出すようになると、アリに巣へ運ばれ、アリに餌をもらい成長し、翌年蛹になり巣から出て翅を伸ばす特異な生態をもつ。

### 参考文献

波根康夫(1957) クロシジミの採集記録。千鳥, (3): 29.  
淀江賢一郎(1994) クロシジミ解説及び写真。「山陰のチョウたち」p.74-75. 山陰中央新報社.  
淀江賢一郎・坂田国嗣・藤原泰樹・山本正志(2006) 島根県の蝶類-島根県には何種類の蝶類がいるのか? 「新島根の生物」: 219-245. 日本生物教育会島根大会実行委員会.

### 県内での生息地域・生息環境

玉造は1960年代、三瓶山では1990年代以降の正式な報告はなく絶滅している可能性がある。1990年代以降確認されている生息地は隠岐(知夫里島、西ノ島)のみ。隠岐(島前)は牧畑という放牧場が1,000年以上にわたって維持・更新されており、良好な生息地となっていた。隠岐島産は特異な地域個体群であり、特別な保全が必要である。なお、木村康信氏が隠岐島にゴマシジミの記録があると書いておられるが、それはクロシジミメスの同定誤りである。ご本人に両種の標本を持参し確認している。1940年代の昆虫図鑑はモノクロ手書き図だったため同定を誤ったものである。

### 存続を脅かす原因

計画的な雑木林、草地の更新が必要である。10年ほど前から隠岐(知夫里島)では、放牧場を近代的に整備するため除草剤によってアキグミが除去されるなど、憂慮される事態がおきている。

(執筆: 淀江 賢一郎)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チョウ目シジミチョウ科

### シルビアシジミ

*Zizina emelina emelina* (de l'Orza, 1869)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)

撮影者(提供者):筆谷憲一



#### 選定理由

産地が局地的で、1990年代から著しく個体数が減少している。

#### 概要

翅長10～12mm。4月下旬ごろ第1化が現れ10月ごろまで年4～5回の発生と思われる。ヤマトシジミに酷似し、混生するが、後翅裏面の黒斑の並びで識別できる。食草ミヤコグサが繁茂するシバ状の草地に見られる。食草の花やウマゴヤシ、カラスノエンドウなどで好んで吸蜜し、時には吸水もする。

#### 県内での生息地域・生息環境

生息環境は牧場、河川堤防、田畑の法面、海岸岩場の狭い草地など。松江市(旧島根町)、出雲市(旧大社町)の日本海の潮をかぶるような岩場の発生環境は全国的にもまれであるために採集圧を受けている(西田秀行氏の発見)。高津川、江の川、周布川などの河川敷や堤防は草刈りを行う時期や範囲に工夫が必要と思われる(10月に一齐に広範囲に刈り取らないなど)。隠岐(知夫里島、西ノ島、中ノ島)の牧場・海岸草付きにも生息している。

#### 存続を脅かす原因

草地の荒廃、植生遷移。採本種はコレクターのターゲットになり、過度な採集行為が見られている。

(執筆: 淀江 賢一郎)

#### 参考文献

足立信一郎(2020) 珠玉の標本箱、シルビアシジミ。NRC出版。  
宮本詔子(2022) 畔法面にシルビアシジミの生息を確認(益田市)。すかしば。(69): 61。  
岡田雅裕(1951) [島根県の] アサマイチモンジとシルヴィアシジミ。昆虫石見。(2): 13-14。  
岡 義人(1970) 出雲市未記録の蝶追加3種(ツマグロキチョウ、シルビアシジミ、リュウキュウムラサキ)。NECYDALIS, 3(1): 8。  
若槻匡志(1957) [島根県下の] シルヴィアシジミの採集記録。千鳥。(3): 28-29。

昆虫類

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チョウ目シジミチョウ科

### ゴマシジミ

*Maculinea teleius kazamoto* (H. Druce, 1875)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠA類(CR)

撮影者(提供者):筆谷憲一



#### 選定理由

生息地も限定され、2000年代から著しく個体数が減少している。全国的にも減少が著しい。

#### 概要

翅長18～22mm。ワレモコウの生える草地に8月に発生するが、食草があっても見られないところが多い。有名な生息地、鳥取県大山山麓では、周囲に林がある急斜面の草地、田畑と山道に段差があり草の中にワレモコウが見られる場所に発生している。幼虫はワレモコウを食べ、途中からシワクシケアリの巣の中で、アリの幼虫を食べて成長するという。

#### 県内での生息地域・生息環境

東部、中部の山地(邑南町、飯南町、奥出雲町など)に局地的に分布しているが、生息地は田畑ノリ面や道路際、林縁などのごく狭い範囲であり個体数も少ない。遷移によって樹木が進入し、ワレモコウ自体が消滅していく傾向がある。アリと共生する特異な生態のため、保全が困難な種でもある。

なお、長野県など信州の個体群、および九州の個体群は、種の保存法に指定され厳重に保護されている。

#### 存続を脅かす原因

草地の荒廃、植生遷移。広島県内ではほぼ絶滅したため、島根県内の産地には採集圧がかかっている。

(執筆: 淀江 賢一郎)

#### 参考文献

後藤雅人(1969) ゴマシジミの新産地。NECYDALIS, 2 (5): 18。  
三島昭一(1991) 島根県東部のゴマシジミ調査記録。すかしば。(36): 14。  
三島昭一(1998) ゴマシジミの吉田村民谷における衰亡の記録。すかしば。(46): 66-67。  
西田秀行(1980) ゴマシジミの一産地。すかしば。(14): 11。  
山本正志(1983) 中国山地のゴマシジミ調査記録。すかしば。(19): 7-8。

絶滅 野生絶滅

絶滅危惧Ⅰ類

絶滅危惧Ⅱ類

準絶滅危惧

情報不足

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チョウ目シジミチョウ科

# ヒメシジミ本州・九州亜種

*Plebejus argus micrargus* (Butler, 1878)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者): 筆谷憲一

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

準絶滅危惧(NT)



### 選定理由

中山間地から山地の湿性草地に生息するが、生息地は局限され個体数も少ない。

### 概要

翅長13-17mm。北海道では溪流沿いの河川敷で発生したり、中部地方では2,000m辺りの乾燥草原でも見られるが、中国地方ではおもに中国山地沿いの湿性草原に見られる。湿原周辺のキセルアザミを食草としている。また、高標高地の林道沿いの草付きにヨモギ食いの個体群が益田市(旧匹見町)、奥出雲町(旧仁多町)、雲南市(旧吉田村)で発見されている。オカトラノオなどで吸蜜する。

### 参考文献

中村慎吾(1973) 中国山地におけるヒメシジミの分布。蝶と蛾, 22(3/4): 104-105.  
山本正志(2006) 島根県金城町弥致牧場にてヒメシジミ・コキマダラセセリを採集。すかしば, (54): 44-45.  
淀江賢一郎(1977) 島根県における湿原性蝶類3種の採集記録。すかしば, (8): 13-15.  
淀江賢一郎・中井博喜・山本正志(1976) 赤名湿原で得た蝶類。すかしば, (6): 30.  
淀江賢一郎・岡 義人(1980) 瑞穂湿原の蝶とトンボ。すかしば, (14): 13-15.

### 県内での生息地域・生息環境

湿性草原に生息する個体群は飯南町(旧赤来町)、邑南町(旧瑞穂町)、雲月山の山頂部、益田市(旧匹見町)、浜田市(旧金城町)など、狭い草地にわずかに残るのみである。近年、奥出雲町(旧仁多町)でも発見されたが、おそらく隣県の広島県庄原市高野町からの飛来個体による一時的な発生と考えられる。赤名湿原では条例で採集が禁止されている。

### 存続を脅かす原因

湿原の埋立(産廃処分場)や乾燥化、草原の荒廃。温暖化も影響があるのではないと思われる。また林道沿いの個体群はきわめて不安定な環境に生息しており、いつ滅びてもおかしくない。

(執筆: 淀江 賢一郎)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チョウ目タテハチョウ科

# ホシミスジ瀬戸内亜種

*Neptis pryri setoensis* Fukuda & Minotani, 2000

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者): 淀江賢一郎

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



### 選定理由

生息地が限定され、激減している。

### 概要

翅長26-32mm。翅裏の基部に黒い斑点があるのが特徴で、近似種との識別は容易。低山地の露岩地に見られる。山陽側では年2~3回の発生といわれているが、県内では2化はまれ。一般には8月には食樹イブキシモツケ、ユキヤナギの葉で巣を作り越冬態勢に入り年1回の発生。飛翔はゆるやかで、ウツギなどに訪花、ときには吸水もする。また、隠岐諸島の4島に生息している個体群も特異であり別亜種(ssp. *yodoei*)とされる。なお、2018年、松江市内で本種が発見されたものはssp. *shinkawai*と判断されている。大阪などから持ち込まれたユキヤナギの植栽によって幼虫が持ち込まれたものと推測される。

### 参考文献

藤岡知夫(1998) 世界のホシミスジの地理変異-2新亜種の記載を含む-。ホシザキグリーン財団研究報告, (2): 263-274.  
伊藤 寿(2006) 中国地方のホシミスジの謎。日本鱗翅学会中国支部会報, (7): 4-6.  
三島昭一(2007) 島根県産ホシミスジの分布と一考察。すかしば, (55): 34-35.  
岡本土朗(1951) ホシミスジの新産地。昆虫石見, (2): 18.  
淀江賢一郎(2021) 松江市でホシミスジを発見する。すかしば, (68): 10.

### 県内での生息地域・生息環境

三瓶山、三階山、大麻山、立久恵峽、江の川流域(断魚溪・千丈溪など)で記録されている。いずれの生息地もイブキシモツケなどが生える露岩地。立久恵峽では6月に実施される殺虫剤空中散布によって激減した。ただし最近発見された人為的に植栽されたユキヤナギに発生する個体群ssp. *shinkawai*(松江市、奥出雲町(旧横田町)など)は保護するに値しない。

### 存続を脅かす原因

イブキシモツケの生育する崖地の荒廃(崩落や過度なコンクリート擁壁)。隠岐諸島では商品としての乱獲の実態がある。

(執筆: 淀江 賢一郎)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チョウ目タテハチョウ科

# ウラギンスジヒョウモン

*Argyronome laodice japonica* (Menetries, 1857)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

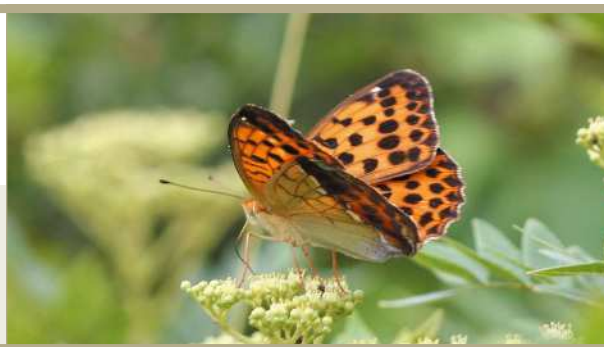
撮影者(提供者):筆谷憲一

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)



### 選定理由

以前は人里近くで普通に見られた種であったが、1980年代より個体数が激減している。

### 概要

翅長28—37mm。6月中旬ごろ発生、林周辺の明るい草地で見られ、アザミやおカトノオなどの花で吸蜜する。盛夏には夏眠し秋に再び現われ産卵、卵または1令幼虫で越冬する。1970年代は普通種のため注目されることはなかった。しかし、その後、急速に姿を消しつつある。

### 参考文献

有田 齊・濱田 康 (2021) 隠岐諸島産のウラギンスジヒョウモン(*Argynnis* (*Argyronome*) *laodice* (*Pallas*, 1771))の地域変異: 翅表斑紋と後翅裏面黒帯の特徴について, *バタフライ・サイエンス* (20), 2-8.  
三島昭一 (2013) ウラギンスジヒョウモン♀を三瓶山で撮影, *すかしば*, (60): 25.  
淀江賢一郎 (1978) 三瓶山の蝶類 (1), *すかしば*, (10): 37-47.

### 県内での生息地域・生息環境

新利用などで適度な伐採が入り、チョウ生息に良好な里山が、エネルギー改変により放置され、荒廃(遷移の進行)するにつれ著しく減少した。県全域で、なぜ激減しているのがはっきりとした要因がわからないが、草原環境の荒廃が一番影響しているのは間違いない。

なお、隠岐諸島ではまだ比較的容易に見ることが出来る。この隠岐の個体群は最近、別亜種*Argyronome laodice yuzurikai*として記載されている。

### 存続を脅かす原因

良好な里山環境の荒廃。また隠岐諸島の個体群は別亜種として記載されたので、コレクターの蒐集ターゲットになっている。

(執筆者: 淀江 賢一郎)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チョウ目タテハチョウ科

# シートテハ

*Polygonia c-album hamigera* (Butler, 1877)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):森山正治

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

—



### 選定理由

県内では1950年代の古い記録のみで、近年の追加記録がなく、絶滅が懸念されている。

### 概要

同属で平地から山地まで見かけるキタテハに酷似するが、翅表に青い鱗粉がないなどの特徴があり識別は容易。年2回の発生で6月から8月に夏型が見られ、9月ごろから秋型が羽化する。樹林周辺や渓谷沿いに見られ、花で吸蜜したり地上で吸水したりする。飛び方はキタテハより敏速で、人が近づくと敏感に反応するが、吸水中驚いて飛び立っても再び戻ってきて同じ場所で吸水もする。秋型は翅の外縁の切れ込みが大きくなり、裏の模様も変化し、そのまま越冬する。冬の環境に対応するための衣替えだと思われる。翌春現われる越冬個体は、生息地を離れ遠くまで移動することがあるといわれている。既知の食草はハルニレ、エノキ、イラクサ科のコアソソなどだが、山陰ではハルニレと思われる。

### 参考文献

藤村俊彦 (1959) 島根県における蝶の分布10題, *新昆虫*, 11(3): 40-41.  
森山正治 (1978) 私の採集した蝶とカミキリ (一), *すかしば*, (10): 22.  
大脇 真(1956) [島根県松江市] 城山でシートテハ採る, *千鳥*, (1): 21.

### 県内での生息地域・生息環境

奥出雲町(旧仁多町) 呑谷など局地的に発生していた古い記録がある(森山正治氏による複数の採集記録。標本も現存する)。しかし、鳥取県智頭町沖の山で1985年に記録されて以来、山陰地方での確認情報は無い。食草は現在でも多く見られるのに姿を消した原因はさだかでない。長野県信州地方では車の多い国道沿いの渓谷でも、20年前から変わらず見られる所もあり、環境が激変し見られなくなった場所もあることから、生息地自体の変化のほか、北方系の種であることから温暖化も影響しているかもしれない。県内ですでに絶滅している可能性も高い。今後は綿密な幼虫の探索が必要だろう。

### 存続を脅かす原因

渓谷沿いの開発、林道建設などによる環境変化。

(執筆者: 淀江 賢一郎)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チョウ目ジャノメチョウ科

# ウラナミジャノメ本土亜種

*Ypthima motschulskyi nipponica* Murayama, 1969

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

—

環境省カテゴリー

絶滅危惧Ⅱ類(VU)

撮影者(提供者): 筆谷憲一



### 選定理由

1990年代ごろから、生息地が著しく狭められており、個体数も少ない。絶滅が憂慮される。

### 概要

翅長23–28mm。後翅裏面の眼状紋が3つで、同属のヒメウラナミジャノメは5つある。西日本の平地から低山地の露岩地草付、湿地、河川敷、田畑の山側のノリ面、雑木林林縁などに局所的に生息。対馬、屋久島など離島にも生息しているが、隠岐諸島には分布していない。年2回、6月と8～9月に出現。

#### ●参考文献

伊藤 寿 (2005) 島根県島根半島でウラナミジャノメを採集。月刊むし, (418) : 18.  
川元 裕 (2010) 島根県西部におけるウラナミジャノメの採集記録。山口のむし, (9) : 48.  
三島昭一 (1977) ウラナミジャノメの採集例。すかしば, (8) : 22.  
山本正志 (2005) 島根県中部地域(江の川流域)における岩場の蝶(ホシミスジ・ウラナミジャノメ・ヘリグロチャバネセセリ)の採集及び観察記録。すかしば, (35) : 23-25.  
淀江賢一郎・田中宏卓・川上 靖 (2017) 三島寿雄先生の蝶類研究と日本産蝶類コレクション-その特徴と意義-。鳥取県立博物館研究報告, (54) : 1-75.

### 県内での生息地域・生息環境

島根半島から益田市まで局所的に生息するが密度はごく低い。比較的個体数の多い浜田市での観察では、日あたりのよい乾燥した休耕畑や手入れの少ない果樹園で、丈の低いチガヤ、アシボンなどの茂った場所によく見られた。近年、海岸岩場周辺に局所的に生息していることが判明した。また松江市(旧八雲村) 星上山や大田市久利、美郷町(旧邑智町) 君谷のような内陸部での記録も散発的にある。

### 存続を脅かす原因

自然度の高い草付きの減少。

(執筆: 淀江 賢一郎)

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チョウ目ジャノメチョウ科

# ウラジャノメ

*Lopinga achine* (Scopoli, 1763)

カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

島根県固有評価

分布限界種(西限)

環境省カテゴリー

—

撮影者(提供者): 淀江賢一郎



### 選定理由

県内では奥匹見峡、旧・恐羅漢山など限られた場所のみ生息し、著しく減少している。

### 概要

翅長22–30mm。本州では1,000mを越える山地に生息地が見られ局地的になる。成虫は6月下旬から7月上旬ごろに見られ、ゆるやかに飛び、開けた場所に出てきてはすぐ葉に止まり翅をよく広げる。メスを生かして放置しておく、容易に産卵する習性がある。

### 県内での生息地域・生息環境

旧・恐羅漢山頂部は周辺が林になり、中央部は開けて登山者の休憩場所にもなっている。周辺には低木やクマザサなどが見られる。晴天の日には朝8時半ごろより活動を始め、島根県側の林から多くは飛び出してきた。しかし現在はほとんどその姿を見ることはできず絶滅が憂慮されている(なお、このポイントは中村泰士氏が発見されたものである)。冬季は積雪も多く厳しい環境になるが、幼虫はニシノホンモンズゲを食草として育つ。また、山頂だけでなく、裏匹見峡、奥匹見峡などの深い渓谷沿いの崖地に生えるスゲ科を食する個体群も発見されている。

### 存続を脅かす原因

山頂部の改変伐採。渓谷露岩地の荒廃。

(執筆: 淀江 賢一郎)

#### ●参考文献

岸本 修・中島久明・小椋英勇・河野広光 (1983) 島根県のウラジャノメの2産地。すかしば, (19) : 8.  
益田耕作 (1966) 恐羅漢山のウラジャノメ。昆虫と自然, 1 (5) : 38.  
中村泰士 (1975) 匹見町のミドリシジミ類-付・恐羅漢山のウラジャノメについて-。すかしば, (4) : 3-5.  
渡辺一雄 (1993) 中国山地における氷期の遺存種ウラジャノメ。「日本産蝶類の衰亡と保護第2集」: 111-124.

## 絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

チョウ目ジャノメチョウ科

# クロヒカゲモドキ

*Lethe marginalis* (Motschulsky, 1860)

### カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)	絶滅危惧Ⅰ類 (CR+EN)

撮影者(提供者):筆谷憲一

### 島根県固有評価

分布限界種(西限)

### 環境省カテゴリー

絶滅危惧ⅠB類(EN)



### 選定理由

本州、四国、九州に分布するが産地は局限されている。県内では浜田市周辺のみから知られていたが、衰亡が著しく絶滅が危惧されている。

### 概要

翅長30—34mm。同属のクロヒカゲに似るが眼状紋の大きさで識別できる。年1回7月下旬に出現。クヌギ、コナラなどの雑木林を生息域とし、昼間は林の中で静止しているが、曇った日や夕方に活発に活動する。クヌギ、タブの樹液を好み、訪花は観察されていない。多産地であった長野県や山梨県などでも開発で雑木林が荒れ、減少している。

### 参考文献

有田 齊・前田善広(2014) 珠玉の標本箱(8) . 84pp. NRC出版。  
石本信博・佐々木保(1979) 浜田市で採集したギンイチモンジセリとクロヒカゲモドキ。すかしば。(12): 30。

### 県内での生息地域・生息環境

県内の生息が唯一確認されている浜田市三階山周辺の雑木林は、高速道路や県立大学などの大規模開発が進み、生息域が極端に減少している。わずかに残されたクヌギ林の保全が必要であり、このままクヌギ林の伐採が進めば本県から姿を消す恐れがきわめて高い。

### 存続を脅かす原因

大規模な開発によるクヌギを主とした雑木林の消失。  
(執筆: 淀江 賢一郎)

## 絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

トンボ目アオイトトンボ科

# オツネントンボ

*Sympecma paedisca* (Brauer, 1877)

### カテゴリー区分

2004	2013/2014	2026
絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)	絶滅危惧Ⅱ類 (VU)

撮影者(提供者):北山拓

### 島根県固有評価

—

### 環境省カテゴリー

—



### 選定理由

県内の分布が局限される。また過去に発見された産地のほとんどが絶滅状態である。

### 概要

全長35—41mm。全身淡褐色をした地味な色調のイトトンボ。未熟なホソミアオイトトンボとよく似るが、閉じた翅の縁紋が重ならないことで区別できる。初夏に羽化した個体はそのまま林縁などで生活し、越冬を終えた翌春、生殖活動を行う。和名「オツネン(越年)」は、成虫で越冬することに由来する。ユーラシア大陸の北寄りにも広く分布し、国内では北海道、本州、四国、九州北部に分布するが、西日本ではまれとなる。

### 参考文献

北山 拓・林 成多・大浜祥治(2018) 島根県に生息するトンボ目の目録と生態写真集。ホシザキグリーン財団研究報告特別号, 22: 1-116。  
大浜祥治(1987) 島根県のトンボ10種の新産地。すかしば, 28: 17-18。  
大浜祥治・祖田 周・淀江賢一郎・三島秀夫(2003) 島根県のトンボ相Ⅴ。ホシザキグリーン財団研究報告, 6: 215-290。

### 県内での生息地域・生息環境

隠岐諸島を除き沿岸部から内陸部まで広く分布するが産地は局限される。生息地はいつでも日当たりのよい植生豊かなため池である。なお県内で越冬の様子は観察されていない。

### 存続を脅かす原因

池の水質悪化や産卵基質となる抽水植物の除去。成虫の生活場所となる林の消失。

(執筆: 大浜 祥治)